
ミラクル症候群

水姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラクル症候群

【Nコード】

N0393B

【作者名】

水姫

【あらすじ】

桃谷沙良は普通の女子高生。そんな沙良のもとに、空から異界人が降ってきた！？しかもその子は特異体質で……。常識人沙良と電波系朱鳥のちよつとエッチなどたばたファンタジーコメディ

プロローグ

ここは異世界。

たくさんの特異種族が暮らしている。翼を持つ者、自然の力を司る者、何千年も生きる者など…。

そして、この世界の全ての住人が魔法を使えた。

その中には、猩色族という種族がいた。ある事件がきっかけで、今は数少ない種族である。また、この猩色族も例外なく、特異体質であった。

プロローグ

「朱鳥、何処行くんのだ？」

「ちよつと月夜湖に。」

「じゃあ俺も…」

「ダメ。一人でランデブーするんだ」

「……。」

朱鳥アスカと呼ばれた者は、朱色の髪を揺らし、スキップしながら外へと出ていく。外見からして、15、16歳ってところだ。

そんな朱鳥を冷やかな眼で見ているのは、青い頭をした青年。見た目、さわやかフェイス。

「一人じゃランデブーにならないよ。」

コッソ、と黄緑色した髪の少年が朱鳥の頭を軽く叩いた。

「あら、翠。」

「それに、もうすぐ夜になっちゃうし…。」

「あつ！それは危ない！かわいい私は襲われちゃうわVVキヤー怖い！だから男って嫌。もう私に近付かないで。」

「なんでそうなるんだよ！」

「うわ、翠サイテー。」

「何こいつら！ムカつくんだけどお！」

無茶苦茶な言葉に、ツッコミをいれるのは彼女の弟、シオンミドリ【紫音翠】。
そして冷めた目で翠を罵るのは、この二人の兄である、「クモセイラ」【黒夜青空】
だ。

「まあ、それはどうでもいいとして……」

「ヒドっ（涙）」

「じゃあ私行ってくるから。」

「無視！？」

太陽は沈みかけ、薄暗い空には星がいくつかが光っていた。

「今日は月が明るい……。狼男なんか会ったらやだなあ。」

朱鳥は湖の前に立って、中を覗いていた。

「うーん…幻想的。」

（これなら、あの伝説もあながち嘘じゃないかも。）

いつのまにか太陽は消え、西の空には満月が顔を出している。

「…そろそろかな。ああもうっ！猩色族って面倒くさいイ！まあ私は才色兼備だから文句言わないわvvああ、私って何ていい女なの」

自画自賛する朱鳥。 ついでに才色兼備の意味を理解せずに言っている。

風が吹き、木々がざわつく。ふと、背後に気配を感じ振り向こうとした時、背中を思いきり押された。

「わっ！ちよっ…！」

大分近付いて覗いていた為、簡単に湖へと落ちる。

バシャンッ！

水しぶきが舞い、朱鳥はここから姿を消した。

「見極めなさい。」

突き落とした張本人はそう呟き、風と共に去っていった。

しかし、落とされた朱鳥はそんな事知るよしも無く、

（この朱鳥様を突き落とすなんて一体誰だ！無理心中でもする気がちくしょー！）

などと、遠のく意識の中思っていた…。

全ての物語は、ここから始まる

第1話 空からの来訪者（前書き）

今回は、主に主人公の説明みたいなもので、軽く読む程度で大丈夫です。コメディーを読みたい人は、第2話からどうぞ。

第1話 空からの来訪者

私の平和な日常を返して！

第1話 人様の家を訪ねる時は、ドアから入るのが礼儀

「ただいまー。」

誰もいない家へ言う。最早これは、癖とも言える独り言だ。

今日は珍しく部活が休みなので、早く帰って来れた。顧問がどーのこーのとか言ってたけど、詳しい事は知らない。

私は、母親は二年前に他界していて、父親は外国に出張中な為、このマンションの四階に一人暮らししている。無責任な両親だ。

まあ、毎月父から仕送りはたくさん来るし、わりといい生活してる。少し寂しいけれど、こんな平穏な日々がいつまでも続いてほしいと思う。

起床・学校・部活・入浴・睡眠。そんな当たり前な事を幸せと感じる。

だが、その幸せはいとも簡単に崩れるのであった…。

「んんん？まだ5時かあ。何しようかな？」

そんな事をばやいてると、窓が揺れてる。それは、風が強くなってきた事を表していた。

（あ、洗濯物取り込まなきゃ！）

今日は、天気にもまれていたので、たくさん干していたのだ。

一人暮らしという都合上、料理・掃除はもちろん、家事全般をやらなきゃいけない。かつつなりめんどくさいが、慣れると上手くなるもので、今では専業主婦なみである。…なんか可哀想な女子高生だな私。

ベランダへ出ると、もう夕日が沈んでいた。最近暗くなるのが早い。

（ああゝめんどくさい！まあ、一人分だからまだマシだけど。）

干してあるものを、ひとつずつポンポンと部屋へ投げいれる。

風が強く、少し肌寒い。

「よし、これで最後……と。」

全てを取り込み、部屋へ入ろうとした時だ。

空になにか見えた。

「いったい何……ん？」

言いかけた時、思わぬ光景に目をみはる。

……いや、だってあれ、こっち来てない？なんかだんだん近付いてる？
っていうか、なんか、なんか………落ちてきてないイイイイ
イイイイ！？

（ひっ、ひと！？）

一瞬だけど、確かにそう見えた

受けとめるか！？いやいやいや。無理。いくら私でも腕折れるって！

でもこっち来るよ？見放すのか私！そんな心ない事できない！そう

だよ！大人になるんだ。お前ならできる。この腕で受けとめるんだ！
さあ来いッッ

……ってやつは無理イイイイ！

今までの思考時間、約1 / 5秒

これから聞こえるであろう衝撃音に、目をつむり耳に手を当てる。

（…あれ？）

なかなか聞こえず、恐る恐る瞳を開ける。

なんとそこには、朱色の髪をツインテールにした美少女がポカン、と口を開け、こちらを見ている。

（無傷…？）

あまりの驚きに声も出ない。

そんな私をよそに、その子の第一声がコレ。

『君、だあれ？』

私に言わせろ。

第2話 訳あり異邦人

初めて人に殺意をおぼえました

第2話 言いたい事を言わせてくれないってムカつくよね

突然空から降ってきた未確認美少女。

そして現在事情聴取中。

「貴女は何者なの？」

「うひゃゝ！びっくりした。空からまっさかさまっすごくね？なんていうかすごくね？」

「…何処から来たの？」

「え？あ、名前？ギン アスカっていうんだ。銀河の『銀』に、朱色の『朱』に『鳥』で、銀 朱鳥。え？似合ってる？やだ、そんな本当の事言わないでよ、照れるじゃん！」

「……。」

「でも自分も驚いたよー。ここってアレでしょ？人間界ってやつ？自分トリップしちゃったじゃん！初体験じゃん！ギネスじゃん！」
そろそろキレようかな？って思ってた時、アスカというらしい者から『トリップ』という単語が出てきた。

「ト、トリップ！？」

あまりに驚いて、つい彼女の肩を強く掴んでしまった。

「あ、ごめ…」

「いやん！いくらウチが可愛いからって無理強いはやして」

「……。」

「優しくしてね？」

「キレていい？」

キレたい衝動をなんとか抑え、事情聴取再開（全然できてなかったけど）。

「異世界？」

やっと説明する気になった彼女から出てきた言葉は、とてもファンタジーチックなものだった。

「うん。っていつても、君達からみたね。自分にしたら普通の世界だし。」

「そんなまさか…。」

有り得ない。だってこの21世紀、異世界なんていうのは、かなりのロマンチストか、余程の馬鹿じゃない。

「まあ、信じられない気持ちも分かるよ。だって君達人間は、ウチらの事を知らないから。」

それってつまり…

「貴女達は私達の事を知ってるの？」

そう言うと、彼女はニヤ、と笑い

「自分は才色兼備だから」

と自信気に言った。

（あんま関係無い様な…。まあいいけど。）

朱鳥は才色兼備をなんかすごいものとしか理解してません

「それで、これからどうするの？」

これは、ずっと気になっていた事。だって彼女はさっきから困ってる様子が無いし。

「それなら、大丈夫！自分は前向きだから」

それ大丈夫言わない。

戻る方法でも知ってるんかい。

「まだ戻る方法は分かんないけど…」

うわ、なにこの子。エスパー？人の心読んだよ。

「とりあえずは、戻るまでここに居候させて貰うよ。」

（…は？）

「えーと、桃谷 沙良ちゃんね 16歳って同い年じゃん！」

私の名前・年齢を言った彼女の手には、いつ取ったのか生徒手帳が。

「ちょ、何勝手に見て…！」

「なんか一人暮らしっぽいし、家族関係とかのめんどくさい事無いじゃん！」

「だから、何言って…」

「あ、一人暮らしって事は、家事とか全部やってんの？すごい！尊敬するよ。」

「初対面の人に言われたくないんだけど！？じゃなくて…！」

「自分同居に憧れてたんだよ！丁度いいね」

「いや、丁度いいとかじゃないで……一人で決めな……」

「って事で、よろしくね」

「人の話聞けえええええ！」

波乱万丈な日々が始まる……

第3話 異世界の事情

誰でもいいから助けて！

第3話 人の話を聞く時は目で聞く…とか校長先生に言われなかった？

「うーん！おいしい」

もう何度目になるのか、その台詞。

結局この不審者：もとい、異界人の押し（と言う名の唯我独尊）に負け、もとの世界に戻るまで同居する羽目になった。

そして今は、食事中。（当然だけど、私が作った）

「沙良ちゃんは料理が上手いんだね 嫁に欲しいよ」

「はいはい。ありがとう。」

まあ、褒められて悪い気はしないけど。華の女子高生がこんなに家事頑張ってるのだから、おいしいぐらい言ってもらわなきゃ。

…にしても、朱鳥は改めて見ると本当に綺麗な顔してる。睫毛は長
いし、瞳は透き通った銀色。朱色の髪に、白い肌がよく映えてる。
言葉・行動は絶対に認めたくないけど、ものすごい美少女だ。

ずっと見てたせいか、朱鳥が私の視線に気付いた。

「何？見つめちゃって。ウチに見惚れてた？」

からかう様な口調で言うてくる。…外れてないけど。でもそんな事
言えるはずないし（っていうかム力つく）、『はいそうです』と言
う程バカでもない。

「そんなんじゃないよ。ただ、異界人っていうわりとは、私達人間
と変わらないなーって…。」

そう、これはさっきから不思議に思ってた事。だって、違う世界か
ら来たくらいだから、もっと姿形変わってると思う。

それを聞いた朱鳥は、たいして興味無さげに答えた。

「そうゆう訳じゃないよ。自分が人間に似てるだけで、他のやつら
は変わってるよ。」

（それって、いろんな人達がいるって事？）

そんな心の疑問に答える様に朱鳥は続けた。やっぱエスパーだ…。

「自分達の世界は、色々な種族が住んでるの。そうね、沙良ちゃん達も知ってるので言うと…、狼男とか人魚とか？」

「お、狼男！？人魚！？」

「うん。」

あっけらかんと言う朱鳥は、私がもう質問してこないと分かると、また食事を再開した。…ってそれ私のじゃん！何当然の様に食べてんのコイツ！？

それにしても、朱鳥の世界は思った以上に絵本の世界だ。ディニーじゃあるまいし…。

「あゝ！おいしかった！ごちそうさま」

考えこんでた隙に、全部食べ終わったらしい。…本当に全部。

「って私のぶんはー！？」

「すごいね、沙良ちゃん！まだ私と同じくらいの歳なのに料理できて！」

「ちょっと何よコレ！質問ばっかしてて食べるの忘れてたよ！」

「自分はねー、家事が一切できないんだよ。マジで沙良の家に落ちて良かった」

「私の事見えてる！？人の話聞こつよ！！」

「これからも料理・洗濯・掃除・ウチの世話、頼んだよ」

「頼まれたくないわー！！」

コイツ、もう出ていってくんないかな……

第4話 無駄な攻防

もしかして厄年？

第4話 ベッドインとチェクインは間違えない様に

「…何してんの？」

お風呂から出て、さあ寝ようと寝室に来て見た光景。

私のベッドに寝そべって、深夜番組を見てる朱鳥。ツインテールは
ほどこれ、朱色の髪は背中まで届いてる。

「あつ、沙良ちゃん。もう寝るの？自分まだこれ見てたいのにな。」

居候がいい御身分だ。本気で頭痛がしてくる。

「だったらリビングにもテレビあるよ。そっちで見れば？」

「ってか、早く寝させて。」

「えゝ？だって沙良ちゃんもう寝ちゃうんでしょ？」

「そりゃ、ただでさえ今日は疲れたからね。」

毒たつぷりの言葉を吐く。このくらいの復讐はさせてほしい。

「へえ？今日なんかあったの？」

自覚無しかよ。嫌味も通じないって恐えーな。

…そういえば、この娘は何処で寝るつもりなんだろう？

（布団とか無いんだけどなー。）

そう思ってた矢先、朱鳥はテレビを消してベッドの布団に入りこんで言った。

「仕方ない。いい子な自分はもう寝るよ。」

自分で言っな。ってか

「何処で寝るつも…」

言い終える前に、ベッドから豪快なイビキが…。

「何勝手に寝てんのよ！つてか寝るの早ッ！何アンタ！ベッドインしたら、5秒でグー！？」

冗談じゃない！そう思った私は、必死に朱鳥の体を揺らす。

「寝るな寝るな寝るなー！」

だいたいその美形顔でイビキかくな！夢壊されるわ！

「ううん、何よ沙良ちゃん。今日は眠いから無理だつてえ。毎晩毎晩疲れるじゃん。」

「誤解される様な事言つな！そしてここで寝るな！」

耳元で叫ぶと、やっと朱鳥は迷惑そうにしながらも、こつちを見た。

「ベッド以外の何処で寝ろつていうのー？」

「知るか。床でもソファにでも寝そべつてな。」

「うわ鬼だ悪魔だ。いいじゃん、このベッド大きいんだし。一緒に寝て不都合な事もあるの？」

確かに私のベッドは大きい。人ふたりくらい簡単に寝れる。

でも、いくら姿が人だからって、この娘は未確認生物。一緒に寝るなんて校長の髪なみに危ないわ。（アレ、必死にカモフラージュし

てるところが、余計に痛いよね…。」

「どうしてもダメ…?」

「うっ…。」

今の状況を説明すると、立っている私が寝ている朱鳥に見上げられてる状態。

なので、この無駄に可愛い顔に、濡れた瞳で上目使いされてるの…

「わ、わかったわ。一緒に寝ていいよ。」

「やったー!」

オイ、さっきの涙目どこいった?

第5話 猩色族の条件

もう全てが有り得ない

第5話 ファーストキスを幼稚園児ですると後悔しない？

結局ベッドに並んで寝る事に。枕の主導権は、なんとか私が握った。

「ねえ、今夜って満月？」

もう寝たと思っていた朱鳥から、突然聞かれた。どうりでイビキが聞こえないわけだ。

「いや、今日は三日月あたりだったと思うけど…」

「ふーん。」

（じゃあ、ギリギリだな。まあ、遅かれ早かれバレるけど。）

教えたわりには、薄い反応。理解不能…。

「なんかあるの？」

「うん。猩色族は、月によって変わるから。」

「セイシキゾク？」

聞いた事もないキーワードが出てきた。

「自分たちの種族の名前。見た目は、髪・瞳の色以外人間と同じ。あ、あとみんな美形！数少ない種族なんだよ。」

（あ、美形って自覚あるんだ。そういえば、朱鳥の正体聞いてなかった。だけど、なんていうか…）

「異界人にしては、特徴少ないね。」

そう言うと、朱鳥はムッ、とした口調で答えた。

「そんなことないよ！猩色族だって特異体質だよ！」

「どんな？」

当然の疑問を口にする、朱鳥はフツ、と笑い

「そのうち分かるよ。」

と、意味深に言った。

「へえ…？」

正直気になったけど、聞いたって教えてくれなさうだから、私は何も言わなかった。

この時間いておけば良かったというのに。

すっかり寝静まった部屋。イビキで眠れなさう、と思っていたけど隣からは寝息しか聞こえてこない。

カーテン越しに光を感じて、私は目を開けた。

（ん…もう朝？）

眠たい目をこすり、近くにある時計を見た。

（なんだ、まだ5時半じゃん。もう少し寝よ…。）

そう思い、朱鳥のほうへ寝返りをうつた。

すると、目の前に綺麗な銀髪が…。

「銀髪ウ！？」

驚いて飛び起きると、隣には見知らぬ男が眠っていた。

（誰！？）

大声を出したせいか、その銀髪男は『ん…』と言いながら、目を覚ました。

ビクッ

驚いた事に、瞳が朱色だった。しかも朱鳥の髪の色にそっくりな…。

（まさか…）

しばらくお互い見つめあっていただけ、不意にその男が有り得ない言葉を吐いた。

「あー、沙良おはよう。何？もう朝？」

「！」

「？どうした？」

不思議そうに見てくる銀髪くん。

この男、銀の髪に朱色の瞳。朱鳥とは逆…。しかも美形顔。そして、昨日朱鳥が言つてた特異体質。まさかとは思うけど、なんたって、異界人だ。万が一もある。

私は思いきつて、聞いてみた。

「あ、朱鳥…？」

ゴクリ、と唾を飲む。

「え？当たり前じゃん。何言つて…あ、」

言葉を途中で言いかけた。自分の姿に気付いたらしい。気まずい沈黙が続いた。

そしてそれを破いたのは目の前の男だった。

「あー！もうバレたツツ！」

（…は？）

「一日でバレるとかつまらな！マジ有り得ねえし！」

「あ、朱鳥…。」

呆氣にとられた。だって見た目だけじゃなく、声、口調も違う。

「あ、驚いてる驚いてる。そう、これが猩色族の特異体質の正体。昼と夜で性別が変わるんだ。ついでに今は朱鳥じゃなくて銀。」

性別が？確かにある意味すごい。しかも名前まで変わるのか。でも、そんなヤツと同居ってかなりマズイんじゃない？

「ま、こんな俺だけとよろしく」

そう言っつて、男版朱鳥、もとい銀は私の唇に軽くキスした。

(…え)

「いただき」

ポカン、としている私にイタズラに笑う銀。

怒りボルテージ上昇。

パンッ！と鈍い音が響いた。

第6話 変人の思考（前書き）

今回は、朱鳥視点で書きました。朱鳥の馬鹿さが、ここで更に分かると思います（笑）

第6話 変人の思考

とりあえず暇しなそう

第6話 セクハラとは、セクシャルハラスメントの略

殴られた頬は、もう痛みはなくなった。赤みや、腫れがないのは治

癒能力の高い自分たちの体質。

ついでに今、朝食中なんだけど…、沙良ちゃんがずっとこっちを見てくれない。体はもう女なのになー。

「さっきあんな事あったから、照れちゃってるんだね」

あ、睨まれた。恐いって。

アレだ、蛇に睨まれたナメクジ状態。ん？なんか違う？まあいいや（オイ）

「そんな怒らないでよ」。自分、男になるとちよつと性格変わっちゃうっていうか…。それに、キスくらいでそんな怒んなくても」

「キスくらい？」

あ、青筋出てる。こりゃ、かなりキレてるね。余計な事口ばしらない様に、気を付けなきゃ！

にしても、クールに見えてツツコミ激しかったり、経験豊富そうなのにキスでマジギレって…ギャップでも狙ってるのかチクショー。

「んなもん狙ってない！！」

アレ？なんで心の声聞こえてるの？

「何が心の声だあ！バツチリ言っちゃってるからああ！」

「あらら、つい。」

どうやら全部しゃべってたらしい。うーん、自分の素直さが仇になっちゃったわ これだからいい女は困るゝゝゝ

「何それ！ポジティブにも程があるでしょ！？」

「あ、また私の心を覗いたわね。酷い、いくら私達がこうゆう関係だからって…。もう離婚よ！実家に帰っていただくわ！」

「こうゆう関係って、どうゆう関係！？ってか私が帰るの！？」

沙良ちゃんは、カシャンツ！と、食器を乱暴に水道へ置いた。そして、振り向き（お、見返り美人…）

「自分のは自分で片付けてね。」

と言に残して、行っちゃった。

「って、何処行くの？ダメよそっちは！そっちには、地獄の番犬『ケロケロベル』が…！それでも貴方は行くと言っの！？」

「……。」

「冗談です。すいません。自分調子のもてました。」

そんな睨まなくても！沙良ちゃんガンつけ強すぎだから！何その眼力？目からビームでも出そうなんだけどー！！

睨むだけ睨んで、沙良ちゃんは自分の部屋へと入っていった。

なんかさ、閉められたドアって開けたくない？なるよねなる。

って事で

オープン・ザ・ドア！

「沙良ちゃん何して…」
ガンッ！！

痛あああああああ！

ドアを開けた瞬間、私のプリチーな額になんかぶつかったんだけど！

「ちよつ、マジ痛い。泣くかも。」

落ちた物を見ると、それは目覚まし時計だった。うわ、これ角当たったな。

「ちよつと沙良ちゃん！いきなり時計投げるってどうゆう事！？そんな子に育てた覚えはありません！」

「育てられた覚えもないわぁー！！」

そう言っているんな物を投げってくる沙良ちゃん。危ないから！いくら治癒能力高いって言っても痛いんだよ！？

「何！なんなの！？自分が何したっていうのー！」

「着替え中だボケーー！！」

え、マジで？あらヤダラッキーハプニング

「何言ってるんの沙良ちゃんvv自分ら女同士じゃない さあ、心も体もドーンと見せ…」

「セクハラ反対イイイイ！」

あ、これ貯金箱。

顔面に当たるコンマ0・1秒前、確かに見えた。

第7話 日常の破壊

幸せってなんだっけ？

第7話 コンプレックスは、とりあえずチャームポイントって言
つとく

「あー、ヒマ！ヒマ過ぎて死ぬ！！」

沙良ちゃんは学校へ行ってしまった。怪我負わせた挙げ句（もう治ったけど）、置き去りなんて酷い！

「なにが『ここから一步も出ないでね！』…よ。失礼しちゃうわ！」

自分は退屈が世の中で嫌いなものベスト3に入るんだよ！？それを知らずに行くとは…、悪魔だ！

今少し違和感を感じた君！頭いいね

「え？なんかおかしい？」

と思った人、もっと本読めや。

「一步も出るな…か。」

ウチは、『ん』と背伸びをひとつして、玄関のドアに手をかけた。

「そう言われると、出たくなるもんだね。でも、何処行こうかな？」

外へ出ると、風が少し冷たかった。自分の着てる服は、人間界にすると露出度が高い。

「…あ、いいこと思いついたカモ」

沙良ちゃんが悲鳴をあげるのが頭に浮かび、つい、にやけてしまう。

はたから見たら、明らかに怪しい…。ミステリアスなところも、自分のチャームポイントのひとつよ

「そうとなったら善は急げ！」

まだ肌寒い朝、スキップで目的地へとかけて行く。

…ところ変わって教室

「沙良おはよう！」

緩いソプラノが響く。それだけで誰だか分かった。

「姫乃…。」

振り向くと、やっぱり声の正体は姫乃だった。姫乃は私の幼馴染みで、身長148センチとかなり小柄だけど、これでも同じ年。私は背が高いから、いつも姉妹に間違えられる。

「どうしたの？顔悪いよ。」

顔色って言いたいよね…。あえてツツこまないでおくわ。

「実は、昨日空から」

（あれ、ちょっと待て。これって言うていいの？）

「空から？」

不思議そうに、見つめてくる姫乃。

（どうしよう。こんな話したら、『精神科紹介しようか？』なんて言われるわ！）

「え〜？何何？続きは？」

私の気持ちも知らずに、迫ってくる姫乃。幼馴染みなら察しろ！！

「いや、だからね。空からケロケロベルが…」

（ヤバッッ！！朱鳥のがうつった！）

「ケロケロベル？」

（言い訳できねえええええええ！）

『キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン』

「あ、チャイムなっちゃった。じゃあ私自分の席行くね。」

ナ、ナイスタイミング

なんとかピンチから、逃れられた。でも、きっと、ってか絶対次の休み時間聞いてくるわ…。

（全部アイツのせいだ…。）

ぐったりする。なんかもう、やってらんない。

（何故あの時、私は追い出さなかったの？ああー後悔！）

まあ、学校にいる間は大丈夫よね（アイツが家で、何してるか心配
だけど）。

うーん、まさに砂漠の中のオアシス 今までだった学校が、休
息の場になったわ。

ガラッ！！

「ハローエヴリワン 転校生の朱鳥でーす！！」

休息の場に……

第8話 不安と葛藤

何？私に死ねって言うの？

第8話 人は中身とか言うヤツにかぎって、可愛い彼女がいたりする

「髪きれいだね。何人？」

「名前が『銀朱鳥』だもん ある意味ハーフだよ。」

「日本語上手だね!」

「才色兼備だからVV」

「何処から来たの?」

「異世界」

騒がしい教室。それは突然の転校生のせい。その上、美少女だから余計にだ。つかアイツ何しに来たの?

「わ〜! 朱鳥ちゃんモテモテだね。隣のクラスの子まで来てるよ?」

「なんであの異次元な答えに、誰もツツこまないの? 何? 顔が良ければ、全てが許されるの?」

「わぁー沙良、毒舌w」

そりゃ、毒も吐きなくなる。私の休息の場を、またひとつアイツは消したんだから。嫌がらせか? 隅々まで幸せ奪う気か?

（早退しようかな…。いや、でも朱鳥をひとり学校に残すほうが、苦痛かも。）

そんな事を、ひとり悶々と考えていた時、予想してた恐ろしい事が起こった。

「朱鳥ちゃんは、何処に住んでるの？」

…聞いちゃったー！！！！

（いや、これはさすがに正直に言わないよね？少しは考えてるよね？誤魔化せよ？誤魔化すよな？）

「沙良ちゃんの家にいそ…モガッッ」

言いきる前に、朱鳥の口を抑え、拉致った私。ナイス瞬発力！

（…うん、分かってたよ。アンタが常識通じないくらい馬鹿だつて事。そして、そんなアンタを信じた私は、それ以上の馬鹿だつて。）
痛いぐらいの視線を浴びながら、私はマッハ並の速さで教室を離れた。

校舎裏まで来たところで、朱鳥の口を抑えていた手を放した。

「ぶはっ！何するのさ沙良ちゃん！」

案の定、文句を言う朱鳥。

「こっちのセリフ。アンタ私の家に、居候してるって言いそうになったでしょ。」

「?うん」

「うんじゃない!!そんなスキャンダルじゃないのよ!っていうか、なんでアンタ学校に来てるの!？」

嗚呼もう、私叫んばかりじゃない。その内のだ自慢大会でるぞ。のだ自慢っていつても、歌じゃなくて声量のだけど。

「だって沙良ちゃん、ウチの事置いてくんだもん。もしかしてアレ?放置プレイ?そうやって私の事じらすんだ。このサディスト!」

あ、なんだろうコレ

「でも甘いわね!私はこう見えてタフなのよ!?そのくらいじゃ屈しないんだからっ!」

なんていうか、すごい殴りたい衝動にかられるんですけど。

「...とにかく、アンタすぐ帰りなさい。此处に居られたら、心臓もたないわ。」

「それはつまり、ウチにときめくと...」

「あ?」

「嘘です、スイマセン。」

だんだん黙らせる方法、わかってきたかも。

「でも、今更無理だよ。転校手続きしちゃったし。」

なんでできるんだよ

「そのへんは、先生の記憶を軽くいじって」

「だから人の心読むなあー！ってアンタ何やってるの！？現実世界で、漫画みたいな事やめようっ！？」

「魔法くらい、朝飯前！むしろ夜食前さっ」

「聞いてないし。しかもすごいんだか微妙！」

結局噛み合わない。いや、毎度のことだけどね…。

「沙良？」

緩いソプラノ声。なんてバッドタイミング。

「ひ、姫乃…。」

汗があらゆる毛穴なら、噴き出す心地がした。

（ヤバイ！『何ふたりとも、ファンタジックな会話してるの？精神科紹介しようか？っていうか死ねば？』的な展開に…！！）

「朱鳥ちゃん魔法使いなの？すごいw」

そうきたか

「沙良ちゃん、自分褒められちゃった！てへっ」

黙れ

第9話 事情聴取

いい加減泣きなくなる

第9話 美少女に可愛いって言われると、なんでムカつくんだろう

事情聴取第2回戦開始

「どうやって転校生になったの？」

「うすら髪の人の記憶をいじりました」

「（…校長か）その制服は？」

「此処に来る途中、パンかじって走ってた子のを奪っ…貰いました

「

「…家の鍵は？」

「結界はつてきましたvv」

「…なにか言いたい事は？」

「ありませんです隊長！」

「…姫乃。」

「何？沙良。」

「殺意わかない？」

「えゝ？こんな可愛くて面白いのに？」

「いやん、そんな当たり前の事」

旅に出たい。誰も私を知らない所へ。私が誰も知らない所へ。つていうか、このバカが居ないならどこでもいい…。

「でも、びつくりだなあ。朱鳥ちゃんが異世界の住人で、その上沙良の家に居候してるなんて…。いいなあ、楽しそう！」

「じゃあ、姫乃が泊めてあげなよ。私は二日目にしてダウンよ。」

本当にそうしてほしい。あ、でもこの変態と一緒に住ませるのは、姫乃の身が危ないかも。…いや、この娘なら全部天然ボケで乗りきれるか。

「そうしたいのは、山々だけど…」

山々って…、どんだけ苦勞するか知らないから言えるのよ！

「お母様がなあ…、異文化受けつけないから。朱鳥ちゃん見た目派手だし。」

「ああ、白鳥家の家元だもんね。」

そう。姫乃は名家の令嬢だったりする。母親は茶道の家元、父親は有名な物書き。だから、姫乃はああ見えて礼儀正しい。あの天然とロマンチストが消えれば、大和撫子なのに。

「自分は、沙良ちゃんと一緒に住みたいッス！」

ピシッ、と敬礼する朱鳥。

私は違うから。一秒でも早く、アンタと離れたいから。

「沙良ちゃん好かれてるじゃん」

「嬉しくないし。」

スッパリと言いきる。あ、朱鳥が体育座りして泣いてる。まあいいか。

「でも沙良、なんでそんなに嫌がるの？こんな美少女と同居って、目の保養じゃん！」

「姫乃、私の話聞いてた？コイツ夜になると男になるのよ！言葉にもしたくないけど、同棲じゃない！」

「でも、もしなんかあっても沙良は力あるじゃん。そこらへんの男子より。」

「自分に怪力は通じないよ？自分魔法使えるから」

いきなり口挟むな。いつのまに立ち直ったんだよ。もつと突き刺さる事言えばよかった。

「えー、やつぱそうなんだ。でも魔法使いじゃないんでしょ？」

「異世界の者は、皆使えるの。自分ら猩色族の特徴は、性別変化と丈夫さとこの美貌！華奢に見えて、強いよ。生命力・治癒能力高いし。」

あ、私の思考はシカト？こういう時は心読んでくれないのね。便利だなオイ。

しかも、その異世界豆知識、初耳なんだけど。

「ところで沙良。こんな時に言うのもなんだけど、もう2時間目終わったかな？」

「……あ。」

そう言えば、必死で気付かなかったけど休み時間に飛び出してきた

わけで、今頃は授業の終盤…。

「ねえ沙良。提案なんだけど、朱鳥ちゃんが沙良の家に居候してる事、皆に言ってもいいんじゃないかな？」

「えっ！私は嫌よ！？」

「だからさ、沙良と朱鳥ちゃんは親戚とか言っ…て。そうすれば、別に变じゃないし。」

妙に説得力ある提案。確かに、なんて思っちゃう。

「お願い沙良ちゃん！自分ヒマ過ぎて死んじゃうよー！？」

うわ、出たウルウル上目使い。本当にそれヤバイから！動悸激しくなるから！

「…正体バレるんじゃないわよ。」

「沙良ちゃん大好きいー！！」

結局私が白旗か…。

「やっぱ上目使いきくね（妖笑）」

計算！？

第10話 二面性

彼女の事、欲しくなってきた

第10話 アサリの貝柱って食べない人多いよね。…まあ、どうでもいいんだけど

あの日以来、朱鳥は私の従姉妹として、モテモテスクールライフを楽しんでいる。ああウザイ。

それと、最近知った猩色族の体質について。
なんでも、満月に近づく程男でいる時間が長くなるらしい。逆に、
新月に近い程女でいる時間が多いとの事。

今日は満月に近いから、もしもの為に学校を休ませた。おかげで、
今日は最高に楽しい一日だった…！！

そして、帰ってきたらいきなりこの一言。

「自分も学校行きたかった！」

授業全て寝てるヤツが言う言葉か。ってか、コイツ本当に何しに來
てるんだっけ？

なんか答えるのも面倒だったから、とりあえずシカトした。その後
色々騒いでたけど、それもシカトしたら泣き始めた。

あまりにウザイから、チョコレートあげたら、土下座して感謝され
た。

…最近扱い慣れてきたな。

「ねえ、沙良。風呂次入っていいよ。」

「ん、わかつ…、ええ!？」

男になつてゐるし！

「いや、びっくりしたよ。体洗つてゐる途中で変わるんだから。胸ペタンコなるし、下は『放送禁止、自主規制しろや。』」

美形顔でとんでもない事言う前に止めた。この歩くセクハラめ。

「じゃあ俺先に寝るね。」

そう言つて、ベットに寝そべる朱鳥。あ、今は銀か。ややこしいんだよチクショー。

…はい。もう分かる人もいると思いますが、ひとつのベッドで寝てますよ。朱鳥だろうと銀だろうと。まあ、セクハラ発言するわりに手は出してこないし。

（いや、でも一緒に寝てるとか…。嗚呼、天国の母様、ふしだらな娘でごめんなさい。）

「風呂入らないの？あ、独りじゃ寂しいとか？なんなら、俺といゝ入ってきます！」

一刀両断して、銀の側をマッハで離れた。…マジでキモいんだもん。

あー、でも銀の接し方はよく分からん。だって朱鳥みたいに馬鹿じゃないし。

（どこまで本気なのか分かんない…。本当に同一人物??）

ため息が自然とこぼれる。

「じゃ、じゃあお風呂入ってくるね。」

「じゅっくり。」

ニツコリと微笑む銀。

(わ…／／／)

「…どうした？」

「な、なんでもない！」

そう叫んで、風呂場へと光速並の速さで走る。

(うわー！！一瞬ときめいたよ、かなりの不覚！アレは朱鳥なんだよ！？夜はどんなにかっこよくても、あの朱鳥なんだよ！？自分を
持て沙良！！)

目を覚ます様に、熱い湯船へ飛びこんだ。

「…頬染めちゃって、かわいいなあ。」

本当は、戻れる方法が分かるまでのつもりだったけど…どうしようかな。

「犬も三日飼えば、情がうつるってか。」

犬は君と俺、どっちかな？

第11話 満月のチカラ

悪夢どころか地獄だわ

第11話 休日って休む日って書くのに、平日より疲れたぞ

事件は起こった

「…ねえ。」

「何？沙良。」

「今11時だよ。」

「知ってるけど。」

「猩色族って、昼と夜で性別変わるんだよね?」

「うん。」

「じゃあ、なんでまだ男なんだよー!!?」

そう、アス…じゃない、銀はもう昼近くになったというのに、今だに男なのだ。

話違うじゃん!

「ん?ああ、今日は満月だからね。一日この姿だよ。」

「嘘!?止めてよ冗談じゃない!」

「うん、冗談じゃないよ。」

「え、いや、まあそうなんだけど…。」

何コイツ天然!?相手しにくいんだけどッ。

「ところで昼食まだ?俺松坂牛がいいな。」

あはは テメエ独りで食ってこい。

「最近沙良の手作りも飽きてきたしな。」

私と銀は喫茶店に来た。いや、正しく言えば連れて来られた。つていうか、いつまで手繋いでるのよ!!

「いらっしやいませ。何め……」

現れたウェイトレスはお決まりの言葉を途切れさせ、真つ赤な顔して銀を見つめる。…みとれる、の方が合ってるか。まあ、気持ちも分からなくないけど。

「二人。」

「あ、は、はい!」

銀の声で我に返ったらしく、席に案内という仕事をするウェイトレス。

私達が席に着いても、ウェイトレスはチラチラ見てくる。恥じらっちゃって、可愛いなあ。ん?アレ?なんか親父くさい?

つてか、なんか視線感じるんだけど。ただでさえ変わった髪と瞳なのに、美形だから尚更見られるよ銀。

「こんなところクラスメイトに見られたら大変だわ…。」

「なんで?彼氏って紹介してよ。」

「誰がアンタみたいな奴、もとは女じゃない。」

そう冷たく吐き捨てると、銀はおや?と、首をかしげる。私別に変な事言ってないよね!?

「心外だなあ。沙良はいつも俺の事、女と見てたのか？」

「そ、そんな事」

「っていうか、顔近い！だいたい普通食事するなら前後に座るんじゃないの！？なんでコイツは隣に座ってるッ！」

「確かに俺はまた明日から女でいる時間が長いけど、本当は女とか男とかじゃないよ。」

「えっと……。」

「昼は女で夜は男。同一人物だけど、性別ははっきり区切られてるさ。」

「そう言って銀は、顔を更に近付かせ私の耳もとで囁く。」

「だからちゃんと男として見ろよ。」

「ッ！！」

「あまりに熱っぽい声だから、体中の温度が上がる。きっと今の私の顔は、真っ赤なんだろう。」

（銀と暮らすには、顔色を制御する術を覚えなきゃ…。）

「我ながら情けない。でも、あの朱い瞳で見つめられると、頭がぼーとしてしまうのだ。」

少し離れた銀を、チラリと見上げる。ニタニタと、人の悪い笑顔を浮かべてた。

「…何がおかしいのよ。」

「いや、可愛いなと思って。」

「はぁ!!?」

「で、俺の説明理解した?」

「3分の1くらいなら。なんか私には難しい。」

ため息をつきながら言う。だつていまいち分からない。つまり銀は男なのよね? うゝん、中途半端な奴。異界人だから仕方ないのかもしれないけど。

「ようは朱鳥は女で、銀は男なんだよ。簡単な事だろ?」

「……簡単だかなんだか知らないけど、この手は何?」

今の状況、銀に肩抱かれています。しかも、もう片方の手は私のももに…。朱鳥はともかく、アンタがやったら完全、犯罪だよ! 猥褻行為で訴えるつちゅーの!!

「親睦を深める為には、スキンシップが1番。」

「アンタの場合、ただのセクハラよ!?」

「堅いこと言わずに」

「ちょっと、いい加減　！」

さすがに気持ち悪いので、水をぶっかけようとしたとき、

「沙良？」

私を呼ぶ声が。

クラスメイトだなあ、とか

親しい奴だなあ、とか

男子だよなあ、とか

そんな考えがマッハで脳をかけ巡った。

銀朱鳥に私の幸運、吸い取られてない？

第11話 満月のチカラ（後書き）

激甘ッッ！！しかもコメディーじゃないし！糖分多すぎました。虫
歯になった人、ごめんなさいm（――）m
次回も恋愛要素多いかも……

第12話 命名、変態銀頭

コレ、殴る権利あるよね？

第12話 主婦は月9より昼ドラが大好き

「沙良、何してるんだ？それにこの人…誰？」

逃げる

誤魔化す

他人のフリ

そんな事聞けない体にする

沙良は誤魔化すを選んだ！

「う、これは…！」

「どーも、沙良とは深夜に会うような密な関係、デタラメ言ってるじゃねエエエエエエ！！」

私は握っていたグラスを銀にぶっつけた。いや、なんていうか、つい反射的に……。

うわ、店員めっちゃ見てる。ってか、客もみんな見てるよ。何この空気、マジ気まずいんですけど。

ギロリと銀を睨む。だって悪いのこイツじゃん！さっきの発言は精神的セクハラよ！！

「仕方ないなあ……。」

仕方ないって何！？なんか私が悪いみたいじゃん！え、私悪くないよね？うん、悪くない悪く……ないよね！？

「逃げちゃお」

「え？」

ニカッ、と笑った銀は私の手を取り喫茶店の外へと走る。

え、これ逃げていい場面！？

そんな私の気持ちも露知らず。銀は走り続けた。

…天国のお母さん、沙良はとうとう犯罪者になってしまいました。

「ハア、ハア、ハア、ハア　もう無理。少しも動けない。」

「大丈夫？」

「全然大丈夫じゃないわよ！だいたいなに考え「えっと、お取り込み中悪いんだけど…」。」

遠慮がちな声に振り返る。

忘れてた！！

「じゅ、純…。」

「何？沙良の友達？」

「あ、幼馴染みの水無月　純です！いつも沙良がお世話になってます！」

「いや、別になってないからね？むしろ世話してるからね？」

「そうそう。夜まで世話してくれちゃって」

「してないから！そんな事してないから！！ちょ、純信じゃないでよ！？」

「えっと…どういう関係？」

いや、まあもつともな疑問ね。こんな容姿の人なかないもんね。

チラ、と銀を横目で見ると、丁度目が合った。銀は純に気付かれな
いよう私にウィンクする。

（任せて…って事かな？）

「はじめまして、銀っていいいます。沙良とは遠い親戚みたいなもの
で、見ての通りハーフ。よろしく。えっと…純？」

うわーよくそんな嘘スラスラ言えるな。朱鳥だったら、普通に真実
+勝手な妄想言いそう…。コイツ本当に同一人物？

「え？銀って…確か沙良の従姉妹も銀じゃなかった？」

墓穴！！

「どうする銀!？」

裾を軽く引つ張って、小声で聞いた。

「どうしよっか」

考えてないんかい！！

「ぐ、偶然よ偶然！それに朱鳥は名字が銀だし！ね！？」

「え？あ、うん。」

ああ、私まで嘘ついちゃったよ！ごめん純、幼馴染み歴13年なのに……！！

「そうなんだ。沙良ってハーフの親戚いっぱい居たんだね、知らなかった。」

そりゃそつだ。実際居ねえもん。

こんな無理矢理な嘘信じてくれる貴方が愛しいッス。

（ふう、でもなんとか誤魔化せたわ。でも銀を見られるとは、しかも純に……。ああもう！外出なんかしなきゃ良かった！！）

そんな事を考えてると、不意に後ろから肩を掴まれた。

「ふえ？　って何やってる銀！」

今の私の体勢、銀が私の肩を掴み、しかも私の頭に顔を乗せてる。銀は背が高いからジャストサイズ。

（こ、これって抱きつかれてるみたい……！！）

「それじゃ、俺たちこれからデートだからまたね」

「なっ、なに言っ……！！」

私の抗議も聞かず、銀は私を横抱き（つまりお姫さまだっこ）にして、純に背を見せた。

「ちょっと銀！下ろして！！」

「ダメ」

「~~~~ツ！！」

一通り暴れたけど効果なし。少しくらい手加減しなさいよ！
純の目も気になったけど、私は今の状況に精一杯。このスケコマシめ！

（こんな街中姫だっこって、かなりのバカップルでもやらない！痛いくらい視線くるし！穴があったら入りたい……！）

「沙良純情だねえ。」

「黙れセクハラ銀頭！」

その後はご飯食べたたり、映画見たりした。でも『最後にホテル行かない？』とかほざくから銀だけ路地裏に捨ててきた。

第12話 命名、変態銀頭（後書き）

次回からは朱鳥なので、またギャグモード

第13話 血の繋がり

C o m e B a c k 平穏な日々

第13話 これが世間で言うセクシーダイナマイト？

「……ん……………」

ベットに寝ながらも、朝の陽の光が入ってきたのを感じた。だけど、それと共に息苦しさが。

（胸が、重い。なんか乗ってる……？）

覚醒しきっていない頭で考える。その圧迫感で、だんだんと脳が覚めてきた。

プチ、プチとすぐ上で音がする。聞いた事あるような、そう。例え

ばボタンをはずす音。

「つてええ！？朱鳥なにやって　！！」

一気に目が覚める。ガバツ！と上半身だけ起こすと、私に馬乗りしていたのは朱鳥じゃなく

「だ、だれ……？」

そこにいたのは、見知らぬ美人。長い艶やかな紫の髪を垂らし、翠色の瞳をしてる。着ている服は、大きく胸もとが空いたワンピース。この角度だと谷間がくつきり見える。スリットは太股ギリギリまできていて、教育上よろしく無い格好だ。NHK出るのは諦めるべきね。

いや、そんな事より何が大変かって、その人が私の服を脱がしてるのよ。

「あら、起きちゃった？夜這い失敗。」

「なっ、なに言っ…。」

今サラリとすごい事言ったよね？夜這いとかなんとか…夜這い！？

頭をフル回転させても、この状況は理解できない。つてか、できる人はどれだけ順応性あるんだ。ああ、エジソン助けて。99%の成分が努力でできた人。

「あ、朱鳥…起きて。」

隣で寝てる朱鳥を揺らす。こんな奴より、バッタに助けを求めるほうがずっと良さそうに思えたけど、生憎近くにいるのはバッタ以下のコイツくらい。

「ん、ダメだよ沙良ちゃん。私達はまだ早いって…！」

「どんな夢見てんだ！」

ガンッ！

「痛ぁッッ！！」

とりあえずグーで殴った。私のランキング内で、ミジンコ以下になった朱鳥が奇声をあげる。

「ああ、イイところだったのに…。」

（まだ言うか！！）

顔を歪めながらも、朱鳥は瞳を開けてくれた（開けさせたののほうが正しいか）。

「一体どうしたのさ、沙良ちゃん…。」

一時停止する朱鳥。いや、わかるよ。そりゃ驚くよね、見知らぬ美人が私を襲ってるのだから。

「紫音？」

えっ！なに？シオン！？

「ふふ、久しぶりね、朱鳥。」

「つてええ！？ちよつ、ついていけないんだけど！え、何？朱鳥とこの美人は」

「知り合い、なの……？」

「コクリ、と二人は頷いた。」

「つていうか、いい加減重いんですけど。」

「し、姉妹！？」

「朝食しながら、私は二人の関係を聞いた。」

「ええ。朱鳥の姉の紫音っていうの。さっきはごめんね、貴方の寝顔が可愛くて」

「（…朱鳥と同じ血筋ね。本気でやるあたり、タチ悪いけど。）」

「でも、どうして紫音が人間界に居るの？」

「相変わらずかなりのご飯を食べながら（食費ヤバイな）、朱鳥が問

う。

そう言えば、朱鳥はもとも異界人だった。偶然トリップしてきて、戻れるまでここに住むって事になってる。

アレ？でも、異界人の紫音さんがこっちに来れたって事は、もう朱鳥は帰れるの？

そんな、そんなの

嬉し過ぎるじゃないッVV!!

第14話 帰宅願

神様あなたを恨みます

第14話 登れたのに下りれないとかベタな

突如やってきた朱鳥の姉、紫美人『紫音』さん。その時私の脳内で
たくさんの等式が一瞬で浮かんだ。

紫音は朱鳥の姉〓異世界出身

異世界出身〓異世界から来た

異世界から来た〓行く事も可能

行く事も可能〓異世界に戻る

異世界に戻る〓朱鳥が帰れる

「……………」

朱鳥が帰れる「こんにちは平和な日々

「なんて素敵なの!!」

導かれた答えに感動した私は、心の中だけではそれを抑えられず思わず立ちあがってしまった。その衝撃に、イスが豪快な音をたて後ろに倒れる。

「…どうしたの沙良ちゃん?そんなに興奮しちゃって。」

「あ、いや…」

不思議そうに首をかしげる朱鳥。私の心中は察してないみたいだけど、心臓がはね、歯切れが悪くなる。

「フフ、やっと身体がうずいてきた?そろそろ発生するかと思ったわ。」

「は!?!」

ちよつとこの美人さん私に何したの!?!薬でも盛ったわけ!?!それともここはファンタジックに魔法!?!

「って、そんな事より!!なんで紫音さんが私の部屋にいるの!?!」
ずっと聞きたかった疑問をぶつける。そうよ、変態発言にツッコミ

いれてる場合じゃない。

私の疑問を聞いた紫音さんは片眉をあげ『ああ……』、と顎に指をあてがう。

次に出てくる言葉をじっと待つ私の鼓動は、ドクドクとつるさい。

「湖に落ちて、気がついたらここにいたの」

紫音さんはサラリと笑顔で言う。

……湖？気がついたらいた？

なんのゲームだ……！

「そしたら可愛い女の子が寝てたから、つい欲情しちゃって」

うわああ！そこまでは聞いてない……！

「ダメだよ紫音、沙良ちゃんは自分とラブラブなんだから……！」

頬をふくらませて、嘘を平気言う朱鳥。一回樹海に捨ててこようかな。朱鳥なら死なない気がする。

つて、ちよつと待つて。気がついたらここにいたって事は、来たくて来たわけじゃないんだよね。じゃあ戻ることはできないって事？

……その瞬間私は足もとが崩れ落ちる錯覚に陥りました（Sさんの証言）……………

「沙良ちゃん、なんで泣いてるの？」

やっと見つけた光を簡単に崩されたからよッ！！

ああ、うつむくと涙が床に零れてく。そうだ、こんな時こそあの歌を…！

上をむうゝいて あーるこおゝ 涙がーこぼれないようにゝ（泣）

「沙良ちゃんツッコミ役がボケると痛いよ。」

黙れ年中ボケ朱色。たまには休暇しろ

はあ、もうボロボロだわ…。一度期待したことにより、裏切られたダメージ倍増。人はこれを『だったら最初から知らなきゃよかった！効果』と呼ぶ。

そんなものありません

「ねえ、私も異世界に戻るまで、ここにいていい…？」

涙で濡れた私の頬を両手で包み、尋ねてくる紫音さん。

ちよっ、その艶のある表情でアップはキツイですって！！なんか火照ってきたし！

「え、えと、でも寝るスペースが…」

さすがにベッド3人は狭いだろうし…、となお近付く目の前の美人にだじろぎながら、必死に言葉を探す。目線が自然と泳いでしまうんだけど！

「ふふ、それなら大丈夫。私ソファで充分よ。」

「で、でも……」

「駄目かしら？」

うつ……！そんな綺麗な若草色の瞳を濡らして、真っ正面から見つめられると……！！

「わ、かりました。戻るまで、なら……。」

了承してしまった私。どうやら涙目に弱いらしいです（朱鳥参照）

「ありがとう沙良ちゃん！」

「ひゃあ……！」

いきなり抱き締められた；
私免疫ないから動揺するよ……！

「なんか騒がしくなりそうだなあ。」

私達を見て、そう呟く朱鳥。
原因のお前が言うな。

「……まあいいか。あ、ねえ！提案なんだけど別に紫音ソファで寝なくても、自分と沙良ちゃんが抱き締めあえば紫音もベッドに入
フギアア……！」

初めて人に右ストレートをきめた瞬間だった。

天国のお母さん、沙良は今日も元気です。

第14話 帰宅願い（後書き）

久しぶりの更新……！ずいぶん長い間放置しておりすいませんでした
！！

第15話 二重人格

プラスマイナスゼロ？

第15話 分からなくてもとりあえず『うん』って言っとけ

またいつもの様に、目を覚ます。だけど今日は朝日の光ではなく、キッチンからただよう香ばしい匂いの所為だった。

（コーヒー…トースト……？）

香りのもとを予想しながら、隣に寝る異界人を見る。満月を過ぎたせいか、もう女の子に戻っていた。少しホッとして、傍らに置いた携帯を見ると、時刻は6時半。

（朝食作らなきゃ…アレ？でもこの香り……アレ？）

寝惚けていた意識が、だんだんとクリアになる。私は異常に気付いた。

バコピンッ！！

急いで飛び起き、かなり乱暴に扉を開ける。なにか変な音がしたが、この際気にしてられない。

（私以外に誰が朝食を作るっていうの！？）

すっかり目覚めた頭は、冷静になんてなってくれない。驚きの原因を突き止めるべく、私はリビングに走った。

「あ、おはようございます。」

「…おはようございます?。」

私が見たものは、13、14くらいの少年がコーヒーを煎れてる姿だった。

「パンとサラダ作ったので、どうぞ食べて下さい。あ、コーヒー砂糖いれますか?。」

「はあ、どうも…じゃあミルクだけ……。」

私はそう頼んで、椅子に座り、並べられた食事を、口に運ぶ。

「……おいしい。」

つい言葉に出てしまう程それは美味しかった。私より料理の才能ありそうだ。主婦業女子高生のプライドが傷つき軽くショック。

「本当ですか？口にあつてよかったです コーヒーどうぞ。」

「ありがとう。」

満面の笑顔がかわいいな、なんて思いながら、その少年からコーヒーを受け取った。

（ふう…落ち着く。）

………ん？

なんかおかしいよね？

「ってそうだよ！！和んでる場合じゃないッツ！君誰！？」

私がそう叫ぶと、少年は『え？』と、目を丸くする。

私よりいくつか年下に見える少年は、黄緑の髪に、紫の瞳という人間上有り得ない容姿。

なんかこれ、デジャブ

「どーしたの沙良ちゃん？目玉焼き作ろうとしたら、玉子から鶏出てきた？」

長い朱色の髪を垂らし、大きく欠伸しながら起きてきた朱鳥。

「あ、朱鳥助けて！」

「アレ？ツツコミなし？って、あ、翠じゃん。朝食作ってくれたの？」

朱鳥は目の前にいる少年に驚きもせず、さも当然かの様に振る舞う。おいしそー、とか言ってサラダに手伸ばしてるし。

「ちょ、ちょっと！どついう事？この男の子誰？」

「んん？あ、そつか。昨日ちゃんと説明してなかったね。」

朱鳥が呑気にそう言っていると、黄緑の少年はまたもや『えっ』、と声を零す。

「朱鳥僕の事言わなかったの？」

「だって昨日はゴタゴタしてたんだもん。」

なんだか言い争ってる。どついう事？

「じゃあ、改めて紹介します。朱鳥の弟で【紫音翠】シオンミドリといひます。これから色々よろしくお願ひします。」

ペコ、とおじきする少年。

え？紫音？弟？…え？

「混乱してるね沙良ちゃん。」

「だ、だって紫音さんは私より年上で朱鳥の姉……」

言いかけたところで、再び私の脳で等式ができた。

紫音さん II 朱鳥の姉

朱鳥の姉Ⅱ 猩色族

猩色族Ⅱ 朝と夜で性別転換

つまり、夜女性だった紫音さんは昼は男になるので……

「ええええええええ！！！」

「ナイスリアクション」

パチン、とウィンクして親指をたてる朱鳥。

だって昨日と性別どころか年齢や人格まで違うじゃん！！

「えつと、沙良さん。昨晚はなにかご無礼な事しましたでしょうか？　なんか僕、性別変わると人格まで変わって、その上記憶もとぶもので……」

遠慮がちに、うつ向いて頬をかく。なるほど、朱鳥以上に二重人格なのね。

「昨日沙良ちゃんを押し倒したんだよ？」

「えええっ!!」

しかも純情少年。朱鳥の発言に顔真っ赤にして慌てる姿はなんか可愛い。

(あら?でも……)

「…翠くん。なんで昨日はずっと女だったの？」

「あ、それはきつと時差ボケの様なものだと思います。」

時差ボケ!!?

異世界と外国って似てるの!? 異文化コミュニケーション!?

って、私自分で言っておいて意味不明だよ。

「あ、そういえば朝食作ってくれてありがとうね。」

ふと思い出し、感謝の言葉を述べる。

「いえ、住ませて頂けるのですから、これくらい当然です!!」

はにかんだ様に笑う。

朱鳥と同じ血が流れてるとは思えない!! 感動して泣きそう!

「でも沙良ちゃん気を付けたほうがいいよ? 紫音は平気でセクハラするし、翠だつて純情とはいえ思春期真っ盛りだもん。」

おどけて言う朱鳥。お前は存在そのものがセクハラだ。

「うるさいよ朱鳥！存在自体がセクハラの朱鳥に言われたくない！」

「…翠くん、ツッコミ属性？」
「まあ、どっちかといえば」

好感度、倍率ドン！！

第16話 来客は幼馴染み

もうなにも言わないよ

第16話 『驚くなよ!?!』 って言われたから無反応なのになぜか怒られた

そうだよ。人生、大小なりに個人差は有れど、いろいろ起こると思っよう？

空から美少女が降ってきたり、遅れて弟がやって来たり、そのふたりは昼と夜で性別が変わったり、その上変態だったり。

人生一度きりだもんね。いろいろ体験した勝ちだよ。

だからもういいの。こうなったら最後まで付き合っさ。こんな心広い私には拍手！。

なんて思つかあああああ！！

嫌だよ、ものすごい嫌だよ！なんで私がそんな疲れる真似しなきゃいけないわけ！？

私ほど平凡を愛してる女はいないよっ！

え？なんでこんなに荒れてるかって？

聞いて！ぜひ聞いて！

だって、だってこの朱色変態美少女が……！

男連れこんでるううう（私の部屋）。

しかもその男っていうのが、私の幼馴染みなわけ！いつのまにそんな仲良くなったの！？

「沙良ちゃん、顔恐いよ？」

ひょこ、と私の顔を覗きこむ朱鳥。そんな朱鳥の隣には、やや困惑気味の純が。

「……朱鳥、説明しなさい。この状態はなに？」

「この状態って？」

「あんたが純を連れてきた理由よ！だいたい何なの？久しぶりに、学校から別々に帰れたと思ったら、あんたは純と帰ってくるし。純も純よ！なんで当たり前のように此処に座ってるわけ！？」

ビシッ、と指差して責めようと、純は煮えきらない返事をする。彼自身、状況を理解できてないようだ。

「もー、沙良ちゃんったら、ヤキモチ？大丈夫。自分が好きなのは沙良ちゃ　痛ッ」

全部言いきる前に頭を叩いてやる。自意識過剰にも程がありすぎだわ。

「あゝ、おふたりさん」

不意に、純が言葉を発する。私と朱鳥は一緒に振り向いた。

「朱鳥ちゃんに呼ばれて来たけど、此処に俺いていいの？」

……きつと強制的に引っ張ってきたんだろうな、朱鳥。その光景が目に見えかぶ。

「ああ、帰っていいよ。ごめんね、うちのバカが迷惑かけて」

思えば、朱鳥と純って何気初対面？クラス一緒だから会ったことあるだろうけど。前は朱鳥、男だったしね。

「いや、迷惑じゃないけど。久しぶりに沙良の部屋来れたし」

「……そ？」

そういえば、あれからはお互いの部屋行き来してなかった。……もう、必要ないと思ってたし。

「え、なにに？ふたりはどういう関係？」

私と純の間に入りこんで、首を傾げる朱鳥。除け者にされたのが嫌だったのか、眉が下がってる。

かわいいなチクショー。黙ってりや美人なのに。

「……別に、ただの幼馴染だよ。ね？」

「え、あつ、うん」

純の発言にあわてて同意した。少しだけ、胸がチクリと痛むのは、きっと気のせい。

「……純くん」

朱鳥がふと言う。え？と漏らした純の手を引っ張り、玄関へと連れていった。

「ちよつ、朱鳥！？」

置いてきぼりをくらい、ふた리를追い掛ける。そこには純を外へ出している朱鳥がいた。

「えつと、朱鳥ちゃん？」

戸惑っている純に朱鳥は更に素っ頓狂な言葉を放つ。

「帰って」

はあああああ!?

何言ってんのコイツ! 自分から連れてきて、さっさと門前払い!?

「朱鳥! なにバカなこと」

「だって……」

小さくなる朱鳥。らしくなくてなんだか困る。いつもはものすごいポジティブで自己中で我が道を通つ走る朱鳥よ? 控え目なんて似合わないすぎる。

「いや、いいよ。元々俺は用なかったし。帰るって言っても直ぐ隣だしね」

ハハッ、と爽やかに笑って、純は去って行った。閉められた扉がバタンと響く。

純、なんて良い奴なんだ……! さすが私の幼馴染み!

「ふーんだ。」

後ろで朱鳥がこぼす。なんだか不機嫌な声。なに? めずらしい。

「どうしたの朱鳥。」

そう聞くと、朱鳥は口を尖らせそっぱを向いた。頬は淡い薔薇色に染まっている。

「朱鳥？」

「だって、自分だけ除け者にするし。しかもなんか純くと沙良ちゃん意味深な発言してさ。」

その後もぶつぶつと呟く彼女。
これはもしかして……

「ヤキモチ？」

朱鳥は黙って頷いた。

うわっ、ヤバイ。今の朱鳥ものすごく可愛い。なんだこの可愛さ。

コイツはあれだよ？あの朱鳥だよ？平然とセクハラしたりうちの食費を吸い付くす最悪な悪女だよ？

なのになんでこんないじらしいの——！？

「…自分で連れてきたのに？」

「だ、だって！」

朱鳥はバツと顔をあげる。

いや、なんか意地悪しなくなっちゃって。私サドなのかな。

私をつるんだ瞳で見上げる朱鳥。ヤバ、心臓がかなり働き者になってるよ。

「目が合ったから、これは招くしかないなと」

「待て待て待て。招くもなにも私の部屋だぞ？いや、その前にお前は目が合ったら誰でもかれでも連れこむのか？」

「誰でもじゃないもん！フィーリングが合った人だけだよ！」

「偉かねえッ！！」

やっぱバカだわこの娘！

「沙良ちゃんは朱鳥のなんだからね！」

そう宣言して、私の腰に腕を絡めてくる。

普段なら『んなわけあるか！』って言うて殴るところだけど、なんかかわいくてそんな気になれない。

……かなりの重症だわ私。

「仕方ないな」

ため息混じりに漏らして、朱鳥の頭を撫でてあげると、彼女は無邪気に笑った。

キッチン

「あれ、お客さん帰っちゃったんですか？」

お盆にカップを3つのせ、どこから出したのかお菓子まで用意してる翠くん。

「あ、あのさ、そんな家政婦みたいな真似しないでいいよ？」

「いえ、居候の身分ですからこのくらいさせて下さい！」

「……健気だね」

ずいぶん家庭的な男の子だな。まあ、朱鳥の弟やってるんだから、反動かもね。

第17話 倒錯の世界？

誰か私を助けて……。

第17話 前回同様、状況確認してみよう

それは休日の昼下がりの事

「ねー沙良ちゃん」

ベッドに寝転がり、本を読む私をつつく朱鳥。返事するのが面倒で無視してたら、沙良ちゃん沙良ちゃんとしつこく私を揺さぶる。

「……なによ？」

さすがに鬱陶しくなって、上体を起こし、床にぺたりと座りこむ朱鳥に尋ねた。

相手にされたのが嬉しかったのか、朱鳥はパッと表情を輝かせる。

そして放った言葉はコレ。

「ひ・ま」

「……………」

「ああ、シカトしないで！」

再び本を読み始めた私に焦る朱鳥。それさえも無視してると、本を取り上げられた。

（もうっ、良いところだったのに！）

渋々私はうるさい彼女の方へ向く。

「暇なら翠ちゃんと遊んでくれば？」

「翠は買い物。今日はタイムセールなんだって」

…………どこまであの子は家庭的なんだ。
家事もほとんどやってくれるし。嬉しいけど、私の料理の腕落ちそうだな。

「ね、だから沙良ちゃん一緒に遊ぼう？」

濡れた瞳で上目使い。演技と理性では分かっているんだけど、ぐっとくる。

可愛いなあ…………。

「聞いてる？沙良ちゃん」

首をかしげ、顔を近付けてきた。だから、あんたのアップはヤバイんだって！

「沙良ちゃん、顔赤い」

赤くもなるでしょうが！猩色族だかなんだか知らないけど、なんでそんな無駄に美少女なの！？

「いやん、それほどでも」

！？ 心読まれたっ！

「ふふ。ね、遊ぼう……？」

いつもより数倍甘い声で耳元に囁かれる。体がゾクリと跳ねた。

朱鳥がベッドに乗り上げ、ゆっくりと私の肩を押してゆく。背中が柔らかい布団に触れて。朱鳥は私の足を跨ぐように四つん這い。

「ちよっ」

上から見下ろされ、心臓が高鳴る。慣れない角度。

（いや、何この状態。なんで私朱鳥に押し倒されてるわけ？）

思考が上手く回らない。

彼女の綺麗な微笑に、背筋がゾクゾクする。そして、次第に朱鳥の顔が近付いてきて。

「って、ストップストップ！アンタ何しようとしてんのよ！？」

「そんな野暮な事聞かないでvv」

私は本能的に身の危険を感じた。

（お、犯されるうううう！！）

「いやあー！翠くん助けてえええええ！」

「翠は買い物中」

「主婦かあの子はあつ！！」

なんで肝心な時にタイムセール！？誰かコイツを止めて！

朱鳥は慌てふためく私を見て、クスクスと笑う。チクショー殴りた
い。だいたいこの変態、なんかやけに怪力なんだけど？

「沙良ちゃん、可愛い」

そう言つて、朱鳥は私の頬にチュツと音をたてて軽くキスする。

「……ッ」

一瞬のその感触に、肩が揺れてしまった。

（私、ノーマルなのにいっ）

そっちの趣味はない。

そもそも、今まで手を出された事はなかったのに、なんでいきなり……。過去最高のセクハラも、言葉だけだった。いや、アレとかソレとかは銀だったし。

あり？もしかして銀の時のほうが変態度アップしてる？

「って、結局はどっちも変態じゃん！」

私はそう叫び、朱鳥の顔を押し返す。

「おとなしくして沙良ちゃん」

「できるか！ あっ」

振り回した腕が、朱鳥の手によってベッドに縫い付けられた。布団が乱れ、シーツに皺ができる。

（え、何コレ。そういう展開？そういう展開なの！？）

汗ダラダラの私とは対照的に、笑顔満面の朱鳥。なぜそんな楽しそうなの？

「あ、朱鳥……待って」

「い・や」

こっちが嫌じゃボケエエエ！

心の中でツツコミを入れている間にも、朱鳥の顔が再び下りてくる。

「いただきまあゝす」

「ッ」

もうダメだ、そう思ってきつく目を瞑った瞬間

ガラッ

「沙良ゝ、入るよお？」

扉の開く音と、ゆったりとした緩いソプラノが顔を出した。

「ひ、姫乃」

「あ……、おとりこみ中だった？」

私達を見て、扉を閉める仕草をする姫乃に向原私は必死に首を振る。よく分からないけど、こんなにもグッドタイミングなんだ。去ってもらっては困る。っていうか、この変態と二人きりは嫌だ。

「ほ、ほら朱鳥！姫乃来たから退いてっ」

「え？自分は見られてても気にしな　ぐはあ！」

危険なことをほざく朱鳥の腹に、蹴りをかましてやる。かなりの力を込めたからか、朱鳥はお腹を押さえてのたうちまわった。

（調子乗りすぎだバカ）

涙目の彼女を横目で睨み、私は体を起こす。
きょとん、とした表情をしてる姫乃を手招きした。

「相変わらず愛されてるね」

姫乃はストン、とベッドの上、私の隣に座りながらそんなことを言
つてのける。私はため息混じりに

「からかわれてるだけよ」

と返した。

だってこんな変態、どうせ私じゃなくてもいいんだよ。人をおちよ
くるのが好きなだけ。

（そんなのに巻き込むなっつーの）

生憎、倒錯の世界に興味はない。いや、銀ならいいって訳じゃない
よ？

「酷いよ沙良ちゃん」

私のふくらはぎに腕を回し、膝に頬をすり寄せてくる。
チツ、もう復活したか。治癒力高えな。

「ところで姫乃。なんで私の家に？」

気になってた事を聞く。いや、迷惑なんかじゃないけど。むしろナ

イス。

「えっと、ケーキ焼いたから食べてもらおうと思って」

そう答え、持っていた箱を私に渡す。うーん、ケーキ焼くなんて女の子らしい。本当かわいいわこの娘。

ありがとう、とお礼し、私は箱を開けた。中にあったのは、美味しそうなベリーパイ。色鮮やかで、キラキラした光がとっても綺麗。

「わあ、すごい。早速食べよ！」

私が立とうとした時、

「ただいまです」

ガチャツ、という音と共に玄関から聞こえてきた。

「あ、翠帰ってきた」

そう言つて、朱鳥はパタパタと彼のもとに走っていく。ああ、やつとタイムセールから帰ってきたのね。夕飯、なんだろう。

「沙良、ミドリって誰？」

首を傾げる姫乃。

……また説明しなきゃ駄目？

あーなっ
てこーなっ
てこーなっ
たのオオオ！

第17話 倒錯の世界？（後書き）

ちよっとお色気 前回とは打って変わって、朱鳥攻め攻めです。次回に続きますよ。

第18話 バイバイ翠くん

嬉しくない、全然嬉しくないよ

第18話 360。 回つたらもとに戻っちゃっじゃん

「へえー、弟くんかあ」

一通り理解したらしい姫乃は、感嘆符と共に漏らす。翠くんはぺこりとお辞儀して、よろしくお願いします、と言った。礼儀正しい子だな。感心するよ。

「それにしても、沙良すごいねえ。異界人ふたりと同居してるなんて」

…… 不可抗力だけどね。

「本当にすみません。僕が湖に落ちたばかりに……！しかも姉みたいな変態と寝てるなんて、申し訳ないです」

頭をうなだらせ、謝罪の言葉を述べる翠くん。

「ちょっと翠、人の事言えないでしょ。アンタだって紫音の時は自

分以上に危ないじゃんっ！」

タルトの欠片を口の横付けて反論する朱鳥。　っていうかコイツ、ひ
とりで食べ過ぎじゃね？私のぶんは？

「仕方ないじゃん、記憶ないんだから。　昼も夜も変態道突っ走って
る朱鳥に言われたくないよ」

「その道極めてるもん」

「よして！！」

ボケとツツコミを披露するふたり。　姫乃はそれを笑顔で見つめてる。
なんだかなあー。

「それに沙良ちゃんは嫌々言ってるけど、夜じゃ結構その気なんだ
ぞ。　ただ明るいうちは恥ずかしいから照れ隠しに暴言を吐くだけさ

」

何言ってんだこのアマ。

「ええっ！本当ですか！？」

え、そこ信じちゃうの？

「沙良かわいい」

天然姫め。　意味わからないくせに乗じるな。

私は順にこの馬鹿たちの頭を叩いた。　『痛い』と嘆く3人は、とり

あえずシカト。

「酷いよ沙良ちゃん」

涙声ですがりついてくる朱鳥。本当、うっとうしいな。翠くんを見習え。

「ねえねえ、沙良」

「ん？」

朱鳥と言い合いしてたら、不意に姫乃が話しかけてきた。そして笑顔で衝撃発言。

「翠くんは私の家に居候したらどうかなあ？」

「……………ええ！！？」

数秒遅れて、リアクションする翠くん。

え、ちょっと待って。今この娘なんて言った？
私の聞き間違いだよね？

そんな私の思いとは裏腹に、姫乃は続ける。

「だって家なら広いからちゃんとお布団で寝れるし。お母様には秘密で私の部屋にさ。あ、見付かったら適当に誤魔化して…………」

「えっ、いや、だけど、そんな迷惑かけられません！」

「迷惑じゃないよ?」

翠くんすごい動揺してる。まあ、初対面の人にいきなりそんな事言われたら驚くか。

それに翠くん、確かに今はリビングのソファで寝てるんだよ。しかも、夜は紫音さんだから余計にきつそう。

「駄目だよ姫乃ちゃん。翠なんかと同じ屋根の下で暮らしたら、お嫁に行けなくなっちゃうよ?」

「うるさいぞ朱鳥!」

翠くんには失礼だけど、朱鳥の言うことにも一理ある。ほら、紫音さんには前科があるしさ……。

「よくわからないけど、多分平気。それに私、弟ほしかったんだ」

のほほん、と言う姫乃。全然平気そうじゃないんだけど。

「何言ってるの姫乃ちゃん!今はかわいい男の子だけど、夜は卑猥な危ないお姉さんだよお?」

「否定はしないけど、かなりムカつく」

「本当のことじゃん。前だって自分の沙良ちゃんを襲ったし」

いつからお前になった。それに襲われたのは未遂だ。

……さて、どうしよつか。姫乃はすっかり乗り気だし、ちゃんと紫音さんにも言えば大丈夫かな？

だけど、猩色族はとことん人の話聞かないしなあ。

「でも沙良。襲われたのは1回きりなんでしょ？」

「まあ、そうだけど。」

「じゃあ大丈夫」

それもそうか。それ以来、何もされてないし。何よりいい子だからね。心配いらなかな？

「じゃあ、そうしてもらおう？ 翠くん。」

「ですが……。」

「もう、子供は遠慮しなくていいの。」

渋る翠くんをなんとか説得し、姫乃の家に居候することになった。早いほうがいいという事で、帰る姫乃と一緒に行った翠くん。

でも、いざ考えるともったいなかったな。翠くん、癒し系だし、家事できるし、いい子だし。

たまには遊びに来てもらおうと。

「これで、朝昼晩ふたりきりだね」

！！ み、翠くんやつぱ戻ってきてえええええー！

第19話 さくらんぼ（前書き）

久しぶりの銀登場！

第19話 さくらんぼ

後悔先に立たず、覆水盆に返らず？

第19話 そんなの迷信でしょうが

「沙良、何食べてるの？」

PM8時、私がリビングで果物を食べてると、興味をひかれたのか銀が尋ねてきた。

「さくらんぼ。純から貰ったんだ。銀も食べる？」

「純……。ああ、沙良の幼馴染みで隣の部屋の」

「そうそう。そしてあんたが無断で私の部屋に入れた人。」

にこ、と笑顔で嫌味を言っただけで、銀は苦笑いした。

「……まだ根に持ってるの？」

「そんなことないよ？もう全然気にしてないよ？」

笑みを深くして言い放てば、困り気味の銀。朱鳥も銀も同一人物な
んだから、まだ常識の伝わる銀のほうに嫌味言わせてよね。

朱鳥じゃダメ。怒るだけ、体力の無断だわ。

「いや、本当にごめんって。でも大丈夫、俺なら絶対入れたりしな
いから。」

大丈夫っていうか、それが当たり前なのよ。一応ここは、私の部屋
なんだから。好きでマンションに独り暮らししてるわけじゃないし。

「俺は沙良との二人の時間大切にしたいから、他の男なんか部屋に
あげない」

サラリと恥ずかしい台詞を言っただけ。ただでさえ美形なんだか
ら、止めてほしい。私の心臓こわす気が。

「あんたね、そういうこと簡単に言わないでくれる？ 純粋な私には
毒よ。」

「純白を自分で汚してくのって、快感じゃん？」

「悪趣味。変なことしてきたら、はっ倒すわよ。」

実をひとつ摘みながら睨めば、銀は『へえ』と片眉をあげた。
……
嫌な予感。

「変なことって、どんなこと？」

私が持っていたさくらんぼを奪い、ずいっと迫ってくる。

前の私なら真っ赤になって慌ててたわね。でもその甘いメロメロマスクにも、もう慣れてきたのよ！

「だから………そういうことだっつーの！！！」

パンッ！

思いきりビンタしてやったら、派手な音が室内に響く。

この整いすぎた顔に平手を喰らわせるのは躊躇ったけど、手が反射的に動いてた。成長ね、こりゃ。

「いたたた……。まったく、沙良は手厳しいな。ま、そういうところがいーんだけど。」

「……マゾ。」

「いや、俺はどっちかって言うとサド寄り。」

そんなキラキラした笑顔で言われても。だいたいなんで性的嗜好の談義してるのさ、私等は。

なんだか馬鹿馬鹿しくなって、私はまだ何か言ってる銀を無視して、さくらんぼを口に含んだ。

うーん、美味しい。純に感謝だな。私がさくらんぼ大好物って知ってるなんて、さすが幼馴染み歴13年！明日学校でお礼言っとかなきゃ。

あまりの美味しさにほつぺた落としてると（例えよ例え）、不意に肩を叩かれた。首を回せば、笑顔満面のセクハラ銀頭。

「……なにさ」

警戒心120%の目を向けると、彼はさくらんぼのヘタ（くき？）を私の目前に差し出す。

いや、意味分かんないし。

そんな私の心情を読んだのか、彼は口を開いた。

「これ、口の中で結べる？」

「……………は？」

素っ頓狂なその言葉に、ついマヌケな声がこぼれた。

あ、いや、でも待てよ。なんか聞いたことある。確か結べると、キスが巧いとか。

「……嫌」

「ええ、なんで!？」

「だってくだらないじゃない、そんなの。」

そうだよ、くだらない。いったい誰が考えたんだか。だいたい、そんな器用な真似できる人いるわけ？

私は銀から渡されたヘタを、指先でキュツと結んでみた。

口の中でこれができるって事は、舌使いが巧いって事よね。

(……………。自分で思ってたんだけど、かなり恥ずかしい発言してしまった)

私はため息をつき、結んだヘタをテーブルに乗せた。ヤバイ、顔赤くなってるかも。

「でも、これって案外簡単だよな」

そう言っただけで銀は、ペロ、と舌を出して私に見せた。舌の上には、見事に結ばれたヘタが。

「う、うそ……………」

ついさっき否定した事を、あっさりやってのけたよコイツ。

「き、器用ね」

「そうか？でも紫音のほうが凄いよ。5秒以内に、みつつくらい結べるから」

恐ろしき、猩色族……。っていうか紫音さん、見た目を裏切らない。いかにも百戦錬磨って感じだもんね。

「あ、ふたつ目できた」

そう言っただけで、銀はまたさくらんぼのヘタを舌で結んだ。

.....。

.....。

「銀、今日からアンタ、床で寝て」

「ええっ！！」

ものすごい反応する銀。

（いや、だってねえ？）

「ちよっ、それは無いんじゃない、沙良」

「うるさい。身の危険を感じたのよ」

「大丈夫だって、沙良が寝てる間は手を出さないから！たぶん！！」

「曖昧さ強調してんじゃねええええ！」

結局その夜、嫌がる銀を無理矢理床に転がしときました。

（朝にはすでに隣で寝てたけど）

こんな人と暮らしてて、私お嫁に行けるかな……。

第19話 さくらんぼ（後書き）

なんかそついう話、聞いたことあったので。ついでに私はできませ
ん！

第20話 only you love

だって好きなんだもん！

第20話 本気と書いてマジと読む

「ね、付き合っ「やだ」

「…………え？」

「用ってそれ？じゃあ帰るね」

目の前でぽかんと口を開けてる男子に笑顔で告げ、背を向けようとしたら、腕を掴まれた。

「ちょ、ちょっと待って！この僕が付き合ってって言うてるんだよ！？」

この僕って言われてもなあ。だって自分、この人のこと知らないし。

「僕等お似合いだと思わない？学校1モテる僕と、謎の美少女転入

生の君。」

自分が美少女って言うのは当たってるけれど、この人が学校で1番モテるとは思えないなあ。

っていうか、自意識過剰？やだなあ、気持ち悪い。……え？自分は違うのかって？だって朱鳥は本当に美少女だもん。

「悪いけど、あなたと付き合う気ないの」

そう言って手を振り払おうとしたら、逆にひかれて。そのままゲツ！

「ほら、こうすれば自然とドキドキするだろう？」

いやいや、ドキドキどころかゾクゾクだよ！

気持ち悪い！なんでこんな名前も知らない奴に抱かれなきゃいけないわけ！？

「どう？付き合う気に」

「…せ……」

「え？」

「放せつつってんだろこのブスキモ男！！！」

「ぐはあああああ！」

ドッシャーン！！

思いきり強く急所を蹴ったら、そいつはかなりぶっ飛んだ。

そして涙目で、信じられないとでも言いたげに自分を見てくる。

「アンタみたいな奴がこの朱鳥様に告白するなんて百億光年早いよ。
一昨日来やがれ」

「…なっ……」

金魚みたいに口をパクパクさせて呆然としてる男子にバイバイって
言って、自分は今度こそ踵を返した。

「アンタそれ、隣のクラスの相川君だよ」

「あいかわ？」

教室に戻って沙良ちゃんに事情報告したら、そんな名前が出てきた。

首を傾げると、呆れた顔をされる。酷い、朱鳥ショック。

「相川君はね、とってもモテる男の子だよ。ファンクラブまである
の。すごいね朱鳥ちゃん、そんな有名人に告白されるなんて！」

沙良ちゃんの隣にいた姫乃ちゃんが笑顔満面で言った。

え？ってことはモテるって話ホントだったんだ。そんなにかっこいいかなあ？

「私はあの人あんま好きじゃないけどね。ナルシストって嫌い。だってら同じくらいモテる純のほうが良い。」

「純くん？そんなモテるんだ。でも朱鳥も純くんのほうが好きだな、良い人だし。」

沙良ちゃんとの関係は気になるけど、なんか好き。インスピだけど。

「でももったいないわね。アンタみたいな奴があのもて王子に告白されるなんて。なんで断ったの？」

首を傾げて尋ねてくる沙良ちゃん。ふふ、可愛いなあ。理由なんか決まってるじゃん。

「それはね、正直なんか気持ち悪かったし、何より浮気はしないもん！」

「ちょっと待て。浮気ってなんだ」

「いやん、沙良ちゃん 分かてるくせに！自分は意外と一途なのよん」

「いつ私とアンタがそういう関係になった！言ってみろ！」

「そんな……、あんなに愛を語りあつた夜を忘れたの!？」

「キモイっつーの!！」

ガッシャーン

ぐはぁ!!

沙良ちゃんの鉄拳が、み、みぞおちに……!ヤバイ、吐きそう。朝食食べたタコさんウィンナー出てくるかも。

「ひ、ひどいよ〜」

お腹を押さえてうずくまる自分。見上げれば、沙良ちゃんの冷たい瞳。

…………可愛いVV(危

「そうやって何でもかんでも変な方向に話を繋げるな!！」

「あ、愛故に」

「黙れ変態!どうせからかってるだけのくせに。生憎そっちの趣味は無いのよ。他を当たってちょうだい!」

朱鳥を指差して、ガミガミ叫ぶ沙良ちゃん。

ほえ?からかってるだけ??

その時ピーンとひらめいた。自分にブレーキは付属されてないので、一度そう思ったら止まらない。

「ウフフフ」

きやは、つい笑みがこぼれちゃった

だってだって、沙良ちゃん可愛いんだもん。

「なによその不気味な笑い方は」

「えへへ。大丈夫だよ沙良ちゃん。」

「なにがよっ」

「自分はからかってなんかない。本当に好きなんだよ?」

上目使いで甘い声を出せば、沙良ちゃんがひるむ。やっぱり自分美形
だなあ。沙良ちゃん、朱鳥の濡れた瞳に弱いもんね

「ば、バカじゃない?」

そう言いつつも、視線泳いでるよ。ホント分かりやすいんだから。

「私は誰よりも沙良ちゃんが好き。どんなに素敵な人に告白されて
も、揺るがないよ!だって沙良ちゃん以上に可愛い子なんていない
もん」

笑顔で言っつて、自分は沙良ちゃんに抱きついた。頬擦りしたついで
に、その薄紅色のほっぺに軽くチューする。

たちまち真っ赤になる沙良ちゃん。もう、マジでメロメロなっちゃ
う!

「……から……」

「ほえ？」

「だからそういう趣味は無いって言っただろオオオオ！！」

「うにゃあー！ー！」

本日2度目の鉄拳を喰らった。

…別にいいよ、愛があるなら。自分は、意地っ張りな沙良ちゃんの
照れ隠しだと勝手に思ってるもん！

それに朱鳥は沙良ちゃんが大好きだから、鉄拳くらい我慢できるッ
！………限度があるけど。

第21話 不純異性交遊反対（前書き）

ちよつとシリアス気味です、はい。あまりコメディっぽくはないです。
特に前半。すいません（・・・；）

第21話 不純異性交遊反対

第21話 美しい花には刺でも毒でもなく電波があった

放課後、朱鳥の目を盗みひとりで帰ることに成功した私。ついでに姫乃は委員会の仕事。

「後で朱鳥に怒られるかな……」

まあ、最近は扱い慣れてきたから別にいいんだけど。

むしろ銀のほうが悪介。無駄に美形だし、エロいし、いつも余裕だし、変態だし、なんか一枚上手だし、時々キモいし。

……悪口か、これ。いやでも、本当のことだし。

「沙良？」

ひとり悩んでいたら、不意に背後から肩を触られた。首をめぐらせる。

「…純。」

「今帰り？なんなら一緒に帰ろう。」

「いいよ。」

了解の返事をする、純は表情を輝かせ私の隣につく。嬉しそうに見えるのは、私の気のせい？

（願望なのかも）

いや、それはない。もうふっきったんだ。いつまでも未練タラタラなんて、私は嫌。

『好きだから、別れて』
そう告げられた時から。私は成長してる？強くなれた？

嫌いになれない。だけど、昔みたいなあの感情はないの。愛し続けるには少し、傷付きすぎた。

「沙良？」

彼の声にハツとする。

「あ…ごめん。」

「いや、俺はいいけど。大丈夫？ぼーっとしてたよ。」

「ちょっと考え事」

そう答えると、純はそつかと一言こぼし、また前を向いた。

考えている内容は聞かないんだね。平気、悲しいなんて思わないよ。だってこれは、貴方が望んだことだから。

帰り道が、やけに長く感じた。

「じゃあ、バイバイ」

マンションに着き、お互い違う部屋へ入る。私は微笑む彼に、小さく手を振った。閉まる扉の音が、哀しく響く。

私は昔も今も、純が好きです。けれどそれは、大切な幼なじみとして。

またあの関係に戻りたいなんて、もう言わないよ。

「沙良ちゃんおかえりー」

扉を開けてすぐ現れた朱鳥。

「って、沙良ちゃん！なんでドア閉めるの！？」

ああいけない。つい反射的に。

っていうか、この子いつのまに帰ってたんだ？相変わらず謎が多い。

べたべた触れてくる朱鳥をスルーし、私は自室へ向かった。

腕を絡ませてくる朱鳥を強引にひき剥がし、部屋から追い出す。

「ちょ、沙良ちゃん！そこは朱鳥たちの愛の巣じゃない！なんで追
い出すの！？」

無視無視。

私はふうつとため息をつき、制服を脱いだ。空気にさらされる素肌。
涼しく感じる。スカートに手をかけたとき、

「ねえ沙良ちゃん。」

ドア越しに、朱鳥が声をかけてきた。

「……なに？」

返事をしつつも、手は止めない。ホックをはずした。

「今日純くんと一緒に帰ったでしょ。」

知っていたんだ。どこで見たんだろう。

「…純くんと沙良ちゃんって、どういう関係？」

スカートがパサリと落ち、床に広がる。

聞いてどうするのと言ったところで、この変態のことだ。まともな返事は期待できない。

ならば、正直に言えばいいんでしょう？

私はスカートを拾い、ハンガーで挟んだ。

「幼なじみだよ」

そう呟いて。

「それで、元カレ」

小さく付け加えた言葉に、朱鳥の反応はない。聞こえなかったのだろうか。

クローゼットを開けて、適当に服を選ぶ。

パンツ！

大きな音に驚いて振り返れば、目を見開いた朱鳥と視線が絡んだ。

「……元カレ？」

わたしは何も言わない。

「モト 樹の彼氏じゃなくて？」

「んなわけないだろ」

あ、ついツツコンでしまった。ヤバイな私、ツツコミ道まっしぐらだ。

「元の彼氏……？」

うるんだ瞳で見上げてくる。ちょっと、だからその上目使い反則だつて。なんかものすごい罪悪感に襲われる。

「あの、朱 「どこまでいったの!？」」

……は？

「A? B? ま、まさかCなの……!？」

古いよ。そしてキモいよ。変態にも程がある。

「なんであんたにそんな事言わないといけないの」

「い、言えないの!？言えないような事しちゃったの!？」

「やかましいッ!」

「いやああああ！否定してくれないー！」

ああもう！いちいちうるさい子だなあ。人の傷をえぐるなって。

「……で、実際どこまでやったの？」

どこから取り出したのか、マイクを私にむけてくる。マスコミかお前は。

「どこまでも何も、その頃わたし達中学生だから」

あくまでクールに答える。

「バカにしちゃ駄目だよ沙良ちゃん。今時の中学生は進んでるんだから！」

「近い近い。顔近いつて朱鳥」

「不純異性交遊反対！
つてことで」

ボスンッ

……は？なにこの状況。
なんで押し倒されてんの私。

「ど、どきなさいよ」

「い・や 沙良ちゃんの下着姿かなりそそられるんだもん」

ハッ、そう言えば……！

「不純異性交遊反対じゃなかったの！？」

乗しかかってくる朱鳥を押し返しながら抗議する。だけど変態にはきかないらしい。

「大丈夫。コレ不純同性交遊だから」

「大丈夫言わないそれエエエエエ！！」

その後わたしは、脱ぎ出す朱鳥の顔面に鉄拳を浴びせ、操をなんとか死守した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0393b/>

ミラクル症候群

2010年10月20日19時51分発行